



第 126 号

発 行 者

東筑摩塩尻教育会

編 集 者

会誌会報委員会

私の原点

東筑摩塩尻校長 櫻井 隆夫



退職間近になり、新卒の頃を思い出す。それこそ、私の原点だった。

「櫻井先生、うちの学校には本校と分校があるが、どちらに行きたい？」

教師になることが決まり、赴任校の校長先生から最初に言われた言葉だ。

「大きな学校にはこれから行く機会があると思うので、分校にしてください。」

こうして、私の教員人生が始まった。私が最初に担任したのは、小学校四年生四人だった。女子三人、男子一人だ。

一、授業

授業を始めてみると、たった四人だったが、子どもの学習に対する理解度のばらつきが激しいのに驚かされた。

特に算数で差が激しく、理解が難しいK子は繰り下がりが出来なかった。

そこで、一年の時に使っていた算数セットを家から持ってこさせて、おぼじきで繰り下がりの説明を行った。本人にもおぼじきを操作させていたところ、三日目に分かるようになった。

その時の「先生、分かった」と叫んだK子の嬉しそうな表情が忘れられない。その後も個別学習を続け、少しずつ分かるようになってきた。

Y子は漢字が苦手で、半分くらいしか読めなかった。そこで、クラス全員で一年生から習った漢字を全部カードに書き出した。裏にその漢字を使った熟語を書き出し、徹底的に読む練習を行い、Y子は苦手な漢字が読めるようになってきた。教科書をつかえる事なく読めるようになったY子は表情も明るくなった。

二、学級づくり

学級内にしつかりとした上下関係があり、一人のボスの言うことに皆が従っているのが分かった。

そのボスが算数が苦手なK子だった。算数を個別に教えたり、一緒に遊んだりしている内に自然と私との間に信頼関係ができてきた。ある日、K子がこう言った。「今までの先生は、勉強のできるN子さんばかりひいきしていた。」それが事実かどうか分からないが、クラスを自由に操っているように見えたK子も心の中では寂しさを抱えていることが分かった。

半年ほど経った参観日に、N子が一人で手を挙げているのを観て、父親が驚いていた。「今までK子に遠慮していたN子は、絶対にK子より先に手を挙げられなかった。いいクラスになってきた。」

三、分校の四季と行事

○春：種まきで始まる。花壇や畑に種をまく。

○夏：毎日水泳をする。十五メートルプールで徹底的に泳ぐ。

○秋：収穫の秋、食欲の秋。畑のそばを収穫し、そば祭りを行う。

○冬：スキーの冬。学校横の斜面を利用して毎日スキー三昧だ。

四、日常生活

村の教員住宅に住んでいたの、休みの日には子どもたちが朝から「先生、遊ぼう。」と言ってくる。

分校で朝から夕方まで子どもたちと一緒に遊んだ。時間はたっぷりあったので、子どもたちと様々な遊びをした。

最も面白かったのは、缶蹴りだ。隠れる場所が多い校舎を利用した缶蹴りは、何時間やっても飽きなかった。

五、先輩

冬に大雪が降ると、分校の屋根の雪下ろしをして下さった校長先生。何から今まで教えて下さった分校主任。この濃厚な人間関係は、現在まで続き、毎年必ず会合を開いて、近況報告をしている。

六、地域の方々

地域の方々にもよくしてもらった。早起き野球に入れてもらったり、スキー場の無料券を沢山もらったり、時には泊めてもらったり、本当にお世話になった。

今思い出しても本当に懐かしくなる。

私の「教育の原点」はまさしくここにある。この原点は、今の学校でも大切であると思う。

(塩尻西部中学校)

特集

◆インクルーシブ教育ってなんだろう？ （四校の提案）

違いや多様性を認め合えるクラスを作るためにやっていること

宗賀小学校

クラス替えをして、新たなメンバーでスタートした五年生。多くの子どもたちが、保育園の頃から一緒に過ごし、何でもわかりあっているようだったが、やはり環境が変わると落ち着かないようで、人間関係に不安を抱える子どもが多々見られた。そこで、一人一人の違いや多様性が認められ、どの子どもも安心して生活ができるクラスを作りたいと考え、次のようなことを実践してきた。

○「話を聞くこと」を大事にする

・朝の会でのスピーチ
毎朝、当番がスピーチを行い、クラス全員が質問や感想を発表する活動を行ってきた。テーマも感想も自由だが、質問をするときは「Aさんは○○と書いていました」という言葉をつけて発表するようにした。最初のうちはぎくしゃくした感じだったが、続けているうちに、子どもたちは、自分が集めている物、好きな本、今夢中になっていることなど、みんなの知らない自分を語り出した。

この活動を通し、子どもたちはお互いの好きなものや興味のあること、学校以外の場所で頑張っていることなどを知り合い、友達への理解を深めている。また、みんなに聞いてもらったことで、自分の

好きなことや得意なことを再認識し、自尊心を高めていく子どもたちもいる。私のクラスでは、この朝のスピーチは、お互いの違いを知り、その違いを大事にしようとする気持ちを育てる大事な活動になっている。

・話を良く聞き合う
授業中は、「話をしている人の方に体を向けて聞くこと」を大事にしている。話す側も、聞いてくれる人を大事にした話し方を意識させている。自分の立つ位置、声の大きさなど、聞き手が聞きやすい工夫をするようにしている。

こうすることで、話す子と聞く子が見えない糸で結ばれ、子どもたちは安心して自分の考えを話すことができるようになってきている。

○友達と関わりあう機会を増やす
・二週間に一回の席替え
私のクラスでは、二週間に一度、席替えをする。最初のうちは、席替えをするたびに大騒ぎであったが、今では、誰と隣になって、誰と同じ班になっても、「よろしくね。」と気持ちよく、新たな二週間を始めるられるようになってきている。この二週間に一度の席替え

で、いろいろな友達と話すことができ、お互いを理解するのに役立っている。ペアやグループでの活動が多い授業・席替えでペアが頻繁に変わることを利用して、ペア学習やグループ学習を授業にたくさん組み込むことにしている。授業中は、自由に問題に取り組める時間を多くとり、ペアやグループ、同じ考え方の子どもなどと関わり合って学習していけるようにしている。このような授業を続けてくる中で、子どもたちは、自分達の知恵を出し合い、助け合って問題解決をしていくことを楽しめるようになってきた。そして、友達との考えの違いや友達の特性を理解し、認め合うことができるようになってきている。

このように、私は違いや多様性を認め合えるクラスを作るために、主に話を聞くことのできる子どもを育てること、友達との関わりあいを大事にした授業をすることを続けてきた。しかし、本当にみんなが認め合えるクラスにするためには、私が、子どもたちの違いや多様性を大事にできる目と心とスキルを持つ必要がある。子どもたちの多様性を「よき」と捉えられる温かなまなざしと柔らかな心、様々な子どもたちの個性に対応できる確かなスキルを身につけられるよう、精進していききたい。

(小柳津由紀)



山形小学校の実践

山形小学校

山形小学校は、約五百名の児童が元気にいっばいに過ごす一村一校の学校です。二十二学級のうち五学級が特別支援学級

で肢体不自由学級も設置されています。
① 特別支援学級での支援・配慮

| | | | | |
|---|----|----|----|----|
| 1 | 国語 | 算数 | 習字 | 算数 |
| 2 | 国語 | 国語 | 国語 | 国語 |
| 3 | 算数 | 体育 | 国語 | 国語 |
| 4 | 国語 | 学級 | 図工 | 図書 |

② 通常の学級の支援・配慮
通常の学級では、書字に抵抗がある場合、漢字練習の宿題のマス目を大きくし

で肢体不自由学級も設置されています。また、可能な範囲で原学級の授業に担任や支援員が付き添うようにしています。自・情障学級では、集中しやすいように座席の位置を工夫する、イヤマフを使用する、書字への抵抗を減らすためiPadを活用する等の支援をしています。さらに通常の学級との交流もしています。三年生は給食交流、四年生は清掃交流、五年生と六年生はゲームを通して交流しています。

